

LIVEバトル会場の舞台袖で、新人アイドル周防桃子は一人出番を待っていた。

アイドルとしての桃子にはプロダクションの同期が多く、またプロダクションの方針として、それら少女のほとんどはユニットを組んでの活動を行っている。

桃子は一人だった。

ユニット結成を彼女が断ったからであった。

アイドルとしては新人であるが、芸能人としての周防桃子のキャリアは、その十一歳という年齢から考えると非常に長い。物心ついた頃から常にプロとしての振る舞いを求められてきた桃子には、同期のアイドルたちが素人に見えて仕方がなかった。

そのくせ、彼女たちは毎日楽しそうにしていた。桃子の認識の中では、芸能界はもっと厳しく容赦のない、大人の欲望が渦巻く世界だった。ヘラヘラ笑っているは一瞬で潰される世界だと。だから桃子は、彼女たちと組んで得られることなど自分には無い、むしろ駄目になるとすら思っていた。

自分の才能をもってすればトップアイドルになることはさほど難しくはない、と桃子は信じているが、それには足手まといがいては困るのだ。この会場に来る前も、レッスンするでもなく事務所で何やら談笑している同期たちを見ながら桃子は、ああなつてはいけなさと視線を逸らしていた。視線を逸らす度に胸の奥がぐっと痛むのは、自分がまだプロに徹しきれていないからだだと自らを戒めながら。

桃子にはある思い出があった。

数年前、小学生になりたてだった彼女は、マネージャーや両親が打ち合わせか何かで外していたのか、出番待ちの現場に一人残されて不安に押しつぶされそうだった。周囲のスタッフは本番の準備で殺気立っており、とても声をかけられる雰囲気ではない。涙をこらえながら誰か戻ってこないかとあたりを見回していると、隅のほうで台本を確認している少女がいた。桃子よりもいくらか年上であるように見えたが、それでもこの現場では一番歳の近い存在である。優しくしてくれるかも

しれないと、桃子は少女に話しかけた。

少女は少し驚いたようだったが、桃子の不安そうな様子を見て取ると暖かい飲み物を勧め、落ち着いたのを見計らって言った。私達は皆ライバルなのだから、他人に頼ってはいけないよ、辛い気持ちに負けない子だけが芸能界で成功するんだから、と。その時の桃子には、少女は凜とした強さを持つ、孤高の存在であるように見えた。

そしてその言葉は、それから桃子の支えとなった。あるいはそれは、少女が桃子自身と同様に身一つで大人の社会と相對しているという、言わば戦友に対して抱くような共感があつたからなのかもしれない。少女——岡崎泰葉という名前だと後で知つた——とはそれきり会うことがなかつたが、その声や顔、眼差しは今でも覚えている。彼女は今どうしているのだろうか、と桃子は思う。彼女は負けてしまったのだろうか、それともまだどこかで頑張っているのだろうか。

司会がLIVE開始のアナウンスを始める声で桃子は我に返る。桃子は今回後攻であるため、先

攻のアイドルのLIVEが終わつてからの出番となる。対戦相手は確か、にゃん・にゃん・にゃんとかいう芸人トリオだったと桃子は記憶している。パフォーマンズには多少自信があるようだけれども、所詮はイロモノ、自分の敵ではない、とも。

前奏が始まり、反対側の舞台袖から相手のメンバーが走り出てくる。にゃん・にゃん・にゃんはロシア人ハーフの妖精めいた美少女、人間離れした美貌と歌唱力を持つ女性、そして三段オチのオチ担当猫娘という一見ミスマッチな構成が人気のグループである。最初のメンバーがセンターで招き猫のようなポーズを取つた。

「あーにゃん……にゃん」

観客がどつと沸き立つ。続いて二人目。

「……のあにゃん」

更に歓声。観客の数はかつて桃子に向けられていたそれに比べてはるかに少ないものであったが、熱狂のほどは同じ程度か、あるいは凌ぐほどだった。袖からそれを見る桃子は知らず自分の視線が強まっていた事に気づき、冷静になろうと、握り

しめるペットボトルの水を口に含んだ。そして三人目。

「やすにゃんだにゃ♪」

桃子はペットボトルの水を勢い良く吹き出した。



「納得いかないにゃあ！」

ブラインドの隙間から茜さすプロダクションに猫娘の絶叫が響き渡った。プロデューサーの青年は大声に耳をしかめながら、尻尾を逆立てる少女を苦々しい面持ちで見る。

「そうは言うけどさあ……自業自得たる……」

「Pチャンはこれ見てないからそんなこと言えるにゃ！ 読むにゃ！ してみくに謝るにゃ！」

みくは憤懣ふんたいやるかたないといった面持ちでプロデューサーにスマートフォンを差し出す。受け取った画面には、先ほどのLIVEの感想まとめと思しきサイトが映っていた。

「ええ？ なんだ、SNSのまとめかこれ……な

になに、『感動しました、みくにゃんのファン辞めてやすにゃんのファンになります』『マジでみくにゃんの立場がない』『みくにゃんがやすにゃんに勝つてるところってどこだよ……』『前川OUT 岡崎IN』『にゃんにゃんにゃんのあるべき姿が示されたって感じやな……』『これはみくにゃんのアイデンティティがクライシス』

「いつまで続ける気になゃ！ もういいにゃあ！」

「お前が読めつて言つたんだろ……」

みくはプロデューサーの手からスマートフォンをひったくるように奪うと、決断的に指を突きつける。

「どうにゃ！ 少しは反省したにゃん!!」

「いや全然」

「なんでにゃあ！」

「なんでつてお前」

プロデューサーは言葉を探すように視線を泳がせ、頭を掻き、やがて諦めて大きく息を吐き出した。

「弁当のカマボコ食って卒倒するアイドルつてな

肌寒い日も終わりを見せ始める二月の下旬。私
はコートに身を包んで、寒空の下とある場所に向
かう。時折冷たい風が私の頬を掠めていき、その
度に体はぶるりと震える。

これから暖かくなるとはいえ、まだ少し気温が
低い。早々に寒さとおさらばしたいと思えて仕方
がなかった。吐く息は白く、すぐに空気に溶けて、
雲と同化するように消えていく。それを見るたび
に寒さが助長されてるような気がして、あまり好
きになれそうにない。

「ふう……」

お茶やらおにぎりやらが、窮屈そうにビニール
袋の中で身を寄せ合っている。どれも事務所の近
くのコンビニでプロデューサーさんが買ったもの
で、衣装とかに口を出す時はセンスがあるのに、
ビニール袋の中に女の子が喜ぶようなオシャレな
物なんて一つもない。

「プロデューサーさんに持っていけと言われたけ
れど、何故……?」

一体全体、どうして食べ物が必要なのが分か

らなかった。確かに今から人のところに訪問する
のだから、お菓子とかを持っていくべきだろう。
けれど、ビニール袋の中にあるのは、ただのおに
ぎりだったりする。

首を傾げながらも歩く足は止めない。プロデュ
ーサーさんのことだから、きつと意味があるんだ
ろうし、着けば全て分かる。

事務所から出て、電車を乗り継ぎ、さらに歩い
て女子寮に辿り着く。

ただ、私の目的は女子寮ではなくて、そこに併
設された建物。女子寮のすぐ隣に併設されたそれ
は、コンクリートで作られているために灰色で、
一見上かなり頑丈に見える建物だ。私はそれを見
る度に、怪物でも攻めてくるのかしらと思っ
てしまう。

その建物の入口は一階になく、家の壁に沿って
作られた階段の上にある。工事現場にあるような
簡素な鉄の階段を上がるしか道はなく、カンカン
カンと軽い鉄の音が私の足音に続く。こんな音で
もリズムが取れれば、立派な音楽で。時折わざと

鳴らして階段を上っていく。

少しの遊び心に踊らされ、階段を登り終えることで、ようやく入口に到達する。ふうと息を吐き出してもう一度空気を取り入れる。少し火照った体を冷たい空気で冷やしてから、インターホンを押す。

ピンポンという音とともに、インターホンに内蔵されているカメラが私を捉えたようで、認知をしてくれたらしく、ガチャリと鍵が開いた音がした。

ホラー映画よろしく、ぎいと音を立てて独りでドアが開く。ドアの先は暗闇で、目を凝らしながらも中がまるで見えない。私は意を決め、ドアの中へと入ると、自動でドアが閉まり、勝手に電気がつく。本当にホラー映画みたいね、そんなことを思いながら声を上げる。

「晶葉さん、入りますよ？」

「生き返った心地がするよ」

晶葉さんはおにぎりに満足したようで、ふうりと長く息を吐いた。本人が言うには、食事を取ったのは久しぶりらしい。自分たちが今ちょうど座っているソファも論文や何やらが置かれていて、片づけなければ座れなかったし、ソファ周りの床には幾つかの論文がばら撒かれていた。誰がどう見ても何らかの作業をしていたのが分かった。

相当忙しかったようで、晶葉さんの着ている白衣もどこかよれよれで、とてもアイドルだとは思えない身嗜みだ。よく見てみれば、顔もやつれているように感じる。さすがに髪だけは綺麗に整えられてはいるのだが、それがより白衣をみずばらしく見せていた。

「ここ三日ほど、スタドリで凌いでいてね」

床に落ちている論文から目を離して辺りを見回すと、幾つか瓶が転がっているのが目に入った。至るところに放置してある空き瓶を見ると、どこかの薬物中毒者の家にしか見えない。今が冬だから良いものの、夏にこんな生活をしていたら、す

ぐに虫が湧いてしまう。

こんな生活をしてよくアイドルを続けていられるなあ、と半ば感心を、半ば呆れる。事務所にいるどのタイプにも属してなさそう。強いて言うなら、杏さんに近いのかもしれない。もつとも、彼女の場合はお世話してくれる人が近くにいて、これほど荒れることもなさそう。

「スタドリで生活はさすがにダメですって」

「家から出るのが億劫だな。仕方なく……:~:~といつても、すごい力が湧くから、意図的に摂取はしていたが」

「それは多分、湧いちゃいけない力ですよ……」

冷静なツツコミができるのは、プロデューサーさんのおかげだ。風邪を引いたプロデューサーさんがスタドリを飲んだだけで回復したところを偶々見たことがあったから。だから、私はスタドリに手をつける気にあまりなれないのだけ。

ちひろさんが言うにはちよつと強い薬だそうだが、これを飲んだら誰だつてオリンピック選手になれるのではないかと疑っている。もちろん、な

れるわけがないけれど、それでもありえなくはないと思えた。

「あまり薬は使わないほうが良いのも確かか」

「分かってもらえて何よりです」

仕事に対して有効性は抜群であるのはプロデューサーさんが実証済みだし、その有効性に対して疑いを抱いているわけではない。だけど、出来れば使わないほうが望ましい気がする。流石に病院送りになるような配合を、ちひろさんがやっているとは思えないけれど、万が一つていうこともある。

「しかし、汚くて悪いね。わざわざ来てくれたのに、見苦しいところを見せた」

そう言つて、晶葉さんは少し頭を下げた。あまり見苦しいとは思つてないようだ。そういえば、少し前に発想は汚いところから生まれるなんて事務所で言つていた気もする。

個人の信条に口出しするほど、私も出来た人ではないので、それは言わないでおこう。

「それは良いんですが、どうしてここまで汚く……」

この世界は欺瞞に満ちている。

世の中の全てが、なんて事を言うつもりはないけれど。

少なくとも、私が見てきた世界は。

少なくとも、私が見ている世界は。

煌びやかで、華やかで、輝いていて。

そんな綺麗な世界は四角いレンズに切り取られた極々一部の表側だけ。

そうやって表側の世界が光に満ちれば満ちるほどに、その裏側の影は濃くなっていく。

造り物で、模造品の、正にロケに使うセットのような、そんな世界。

中にはこんな場所を夢の世界のようだという人もいるけれど、あるいは夢の国と称されるテーマパークのような感じで言っているのかもしれないそれは、私にしてみればなるほど納得出来る部分もある。

夢の国と、夢の世界。

国と世界。

国は国境を跨げば辿り着くことが出来る。

でも、世界となるとどうだろう。

別の世界。あるいはもっと大きく別の宇宙。別の次元なんて言い方をすると一気に漫画のようになってしまうけれど、言っている事はどれも同じ、手の届かない場所というそれだ。

一人一人すら通り抜ける事が出来そうにない小さな四角いレンズに切り取られ、電波に乗ってテレビに映し出される全く別の世界の出来事。

けれど、それは完全に別離している訳ではなくて。

だからこそ、その表向きの華やかさだけを見て憧れて、世界を超えて近付こうとする人がいる。

そんな人達を、私はそれこそ数えきれないくらい見てきた。

自分も輝きたいと願って、自分も輝けると信じて世界を超えてきた人達を。

そして綺麗なだけでない知り、影に飲まれて去っていった人達を。

そんな人達を、私はそれこそ数え切れなくらい見てきた。

憧れなんてものは、結局自分の中で都合良く創り上げた幻想に過ぎない。

近づくほどに理想は崩れ、現実を突きつけられ、そうしてほんの僅かな綻びが生まれてしまえば、影は、闇は、そこから容易く入り込んでくる。

どれだけ足掻いてもその浸食は止められなくて、やがて耐えきれなくなつて潰れてしまう。

そんな世界で生き残れるのは、入り込んでくるより尚色濃く冥い、そんな闇を最初から抱えている人か、あるいは逆に何も持たない、文字通り空っぽな人のどちらかだ。

闇に飲まれたとしても、そもそも飲まれるような物が無ければそれも関係ない。

私の周りにいる人達も大体はこのどちらかで、そして私自身も、おおよそ後者であるのだろう。

言われた事を言われるままにこなしていく、生きた操り人形。

生きた、なんて言えるほど生を実感しているかと言われれば、中々首を縦に振る事は出来ないのだけれど。

それでもこうして考えたりする事くらいは出来るのだから、一応生きてはいるのだろう。

けれど、私はそれに特別不満などは感じていない。

私はこれしか知らないから。

これが私にとっての普通だから。

でも。

それでも。

近付いては離れていく、そんな人達を見ていると、私は彼ら、彼女らがほんの少しだけ羨ましくなる時がある。

期待に胸を膨らませた顔と、絶望の底に落とされたような顔を見てさえ、そう思う時がある。

去るといふ事は、帰る場所があるという事だ。

帰る世界があるという事だ。

彼ら、彼女らは私の知らない世界を知り、知らない世界を生きている。

もちろん、私だって別に四六時中〃こちら側〃にいる訳ではない。

普段の生活というものだって少なからずあるし、

学校にだって通っている。

ただ、それらが世間一般で言うところの普通と違うという事は確かなのだろう。

仕事があるから毎日通えない学校。たまに登校出来たとしても、そんな私に友達などはおらず、休み時間も常に一人で、やっている事はといえれば次の台本を読み込んでいくくらい。

最初の頃は、私がテレビや雑誌などに出れば、次に登校した時には周りがその事で話しかけてくれたりもしたけれど、それも今となっては中々疑わしいものだと思う。些細な事が思い出の中で美化されていったのか、あるいは私が勝手に作り出した記憶なのか。

もし、を考えた事がない訳ではない。

芸能活動なんてしていなくて、普通に育って普通に学校に通っていれば、また違った私になっていたのだろうか、と。

けれど、どれだけ考えてもそこにいる自分というものが上手く想像出来なかった。

ドラマなんかの撮影で学生の役を演じた事もあ

るけれど、それも結局は誰かが書いた脚本で、誰かが作った演出の中だけの出来事だ。実際の学校内の様子とは、似ても似つかない。

結局のところ、私はどうやっても「こちら側の住人で、世界を超えるだなんて大層な事は出来ないのだ。

でも、それでいいと思う。

憧れなんてものは、憧れている内が華なのだから。

近付くほどに理想は崩れ、見たくないものばかりを目にしてしまう。

それは当然であり、必然であり、だから私もいつしか諦めて、何も見ようとはしなくなつた。

しなくなつた、はずだった。

あの時、声を掛けられるまでは。

不躰で、失礼で、第一印象は最悪といつてもいいだろう、あの時、あの瞬間。

『キミ、アイドルとかやってみない?』

最初に、何を言っているんだろうと思つた。

次に、この人は誰だろうと思つた。